‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

８２号　1994.4.10
文・編集・発行
恋　怪子

POEM：茨木のり子「自分の感受性くらい」

２月25日に富山県のストリート・ビーツファンの壇上政恵さんから手紙がきた。
「２月23日：真横に吹きつける雪の中、仕事の合間を抜けて『ワイルドサイドの友へ』を買いに行った。待ちに待って、そして待ち続けたBEATS の７Thアルバム。静かに…けれど、しんしんと降り続く雪の夜、いつもより少し大きめの音で、いつもよりなんだかとてもゆったりした気持ちで、聴きはじめた…。」」という文で始まって、手紙のおわりに、「去年の暮からブルーな気分が続いていましたが、ある日、とても『ビクッ』とする詩に出会いました。辛口で…まいりました（笑）今、BEATS 7th アルバムの次に、気に入っています…（笑）」とあって、その詩が書かれてあった。
とてもいい詩だったので、壇上さんに、「作者を教えて下さい」と手紙を出したら、すぐに返事をくれて、それには私がチラシの80号に載せたストリート・ビーツの記事についても書いてくれていた。
「私が、いちばん共鳴したのはやはりBEATS の記事で…。私、去年の暮に、BEATS の ´93 FINAL LIVE(12/4POWER STATION) に向けての意気込みを、書きなぐった手紙を出したと思いますが…あの時の私の心境は、まさしく、『 OKIの怒りをぶつける姿』を求めていました。そんな私が、あの夜…なんとも気持ち良さそうに、語るようにうたう OKIの姿を見て、虚しささえ感じるほどの距離と、もの足りなさを感じました。それからというもの… OKIのことばをかりていうなら『足りないかけら』を探し求める日々の私。ずいぶん苦しい、行き場のない毎日…そんなある日、茨木のり子さんの詩と出会いました。その時私の心は、これまで読んだどんな本より、どんな音楽よりすいよせられました。――――今にして思えば、あの時すでに、 OKIは悲しみを背負った怒りの存在を、思い知っていたのだと…（以下略）」

３月18日。ストリート・ビーツの小冊子「同じ瞳をしていた――路上の友への手紙」に「路上からの手紙へ」というエッセイを寄せてくださった詩人の瀬沼孝彰さんの詩とエッセイが載っている現代詩手帖３月号を池袋パルコＳＭＡ館地階の「ぽえむぱろうる」という詩の専門店で買った。２階の美術館わきのコーヒー・ショップに入って、瀬沼さんの作品を読んだ。エッセイは「コルホーズの玉ネギ畑から」というタイトルで「詩を本当に書き始める端緒になったものはやはり現実の方からきたように思う。」という書き出しではじまっていて、おわりの方に「駄目なことの一切を／時代のせいにはするな／わずかに光る尊厳の放棄//自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」と壇上さんが書いてくれたのと同じ詩の最後の部分が書いてあって、「茨木のり子の名作『自分の感受性くらい』の奥から生きのよい彼女の叱責が聞こえてくる。」という文がそれに続いていた。はっとした。すぐにコーヒーを飲み終えて「ぽえむぱろうる」にもどって茨木のり子の詩集を探した。「自分の感受性くらい」というタイトルの詩集があったのでそれを買った。

こういう不思議なことが起こると、私はいつもひとつのことに熱中していると、いくつものことが深いところで関係しあっていることに気づかされ、そこでこそ出会いに出会えるのだ、と思う。

自分の感受性くらい

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて
気難かしくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか
苛立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのはわたくし
初心消えかかるのを
暮しのせいにはするな
そもそもが　ひよわな志にすぎなかった
駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄
自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

瀬沼さんのエッセイ「コルホーズのタマネギ畑から」の終りの部分

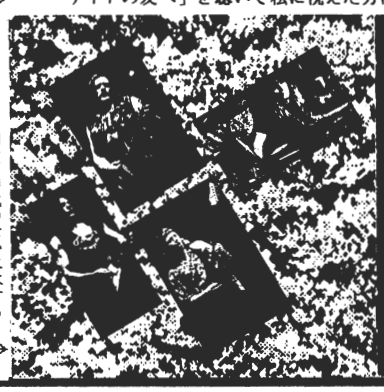
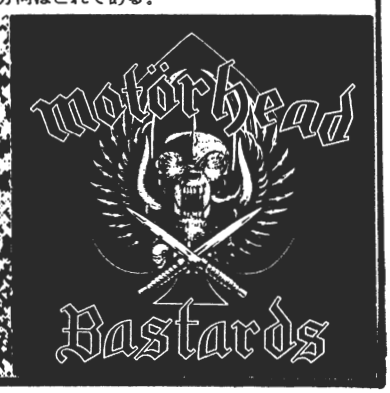
駄目なことの一切を／時代のせいにはするな／わずかに光る尊厳の放棄／自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ
茨木のり子の名作「自分の感受性くらい」の奥から生きのよい彼女の叱責の声が聞こえてくる。
俺たち自身の頭の中にもっともっと深く
俺たち自身の頭の中にもっともっと深く
水を探して井戸を掘ろう
この町田町蔵の名曲「オアシス」の歌詞のように不能さを見極めることによって、新しい詩の泉にふれることができれば。
最近、十代や二十代の友人たちに幸運にも巡り会うことができた。
彼等は残念ながらあまり言葉によって表現されたものには興味を示してくれないが、詩を書く者の欺瞞と虚偽を敏感に見抜く心の批評眼を持っているように思う。正直な彼等に届くような詩が作れるようになることを願う。

←詩集「自分の感受性くらい」
（花神社　定価1750円）

CD：THE STREET BEATS「ワイルドサイドの友へ」

ストリート・ビーツは、「ワイルドサイドの友へ」で初めてライブとアルバムにそれぞれ別の意味を持たせたと思う。
1993.12.4 のパワーステーションのライブで OKIは「いちばん歌いたいことというのが、いつもいつもそうだけども、刹那、刹那ね、いまこの時、というものをずっと俺はその時その時で、できるだけ自分の心情に近いところで書こうとしてずっと10年ぐらいやってきた」と言った。たしかにストリート・ビーツのライブはいつもその「刹那」を感じさせるものであったし、アルバムとライブのちがいはほとんどなかった。それが「ワイルドサイドの友へ」ではどの曲もライブで聴くのとはかなりちがっていて、アルバムだからこそできる演奏でライブとは別の世界をつくり、それに OKIが歌をのせている。アルバムの OKIはストリート・ビーツをバックバンドにしたヴォーカリストという感じである。だから、ライブでの OKIだけをこのアルバムに求めるファンは、戸惑ったりそっぽを向いたりしてしまうかもしれない。
「ワイルドサイドの友へ」を聴いたあとしばらくして MOTÖRHEADの新しいアルバム“BASTARDS”を聴いた。 MOTÖRHEADはもうずいぶん長く活動しているバンドだが、まともに聴くのはこの“BASTARDS”が初めてである。CDの解説を読むと、「MOTÖRHEAD はメジャー・レーベルからドロップして、自らの Motörhead Recordsを設立」し、“BASTARDS”は「誰に気兼ねすることなく徹底した態度でレコーディングしたアルバム」であるという。
ドラムがとりわけ効いている“DEATH OR GLORY”や“I AM THE SWORD”では拳をふりあげたくなるほどだし、“ BAD WOMAN”はシンプルでヘヴィなロックンロールを聴かせるし、このアルバムでいちばん好きな“WE BRING THE SHAKE”は“We bring the shake, All hearts to break We bring these words to mock you now We bring the shake to rock you now”（訳詞「シェイクしてやる　心臓が砕けるほど　この歌でおまえらを嘲笑ってやる　ロックするためシェイクしてやる」）という強烈な歌詞で震わせてくれる。チラシの80号(1994.2.16発行）でストリート・ビーツの１月30日と２月１日のライブについて、「(OKIが）『怒りをぶつける姿』を見せなくなったからといって、『怒り』がなくなったのではなく、『怒り』を『悲しみ』に吸い取らせることができるようになったのだ。それが、『苦しんで大人になっていく』ということなのである」と書いたけれど、“BASTARDS”のなかの“DON'T LET DADDY KISS ME ”は『怒りを悲しみに』の逆で、『深い悲しみ』が『強い怒り』になっていることが静かな曲調とおさえた歌のなかに感じとれる。“BASTARDS”は『怒り』に満ち満ちている。長くやっていても、かなりの年齢になっても、ヘヴィなロックンロールは可能であり、『怒り』を表現し、それに説得力をもたせることは可能なのだ。
「聴きやすくPOP になった」という表現をアルバムやライブ評で見ることがあるが「pop になった」ということは、実は「迎合して白痴になった」ということなのではないのか思わされることがある。「ワイルドサイドの友へ」のOKI の方向は白痴化には向いていないけれども、MOTÖRHEAD の“BASTARDS”のように『深い悲しみ』がふたたび『強い怒り』になるという方向も明確には指してはいない。では OKIの方向はどこを指しているのか？　それは「ワイルドサイドの友へ」を深く聴き、それまで OKIがたどってきた道を探れば、視えてくる。聴く者が、この刹那、いまこの時に持っている人生観や人間観を総動員すれば視えてくる。
「ワイルトサイドの友へ」の探求は、同時に聴く者自身の探求でもあるのだ。
「ワイルドサイドの友へ」はそれを真剣にやるだけの価値を持っているすばらしいアルバムである。
悩みや苦しみ、怒りや悲しみ、そして喜びや驚き。それはなにも10代や20代の青少年の専売特許ではない。いま OKIは30才にちかい。30才には30才の悩みや苦しみ、怒りや悲しみ、そして喜びや驚きがある。 OKIはそれを歌える。「ワイルドサイドの友へ」を聴いて私に視えた方向はこれである。

MOTÖRHEADが1980年に出したアルバム“ ACE OF SPADES”を聴いてみた。この頃にくらべればいまのヴォーカルは声量は衰えているけれど、歌にこめられているものはずっと重くなっている。 MOTÖRHEADのライブが５月26日、27日、28日　川崎クラブ・チッタである。



MOTÖRHEA のCD
“ BASTARDS ”→